

# 令和4年度事業報告

(令和4年4月1日～令和5年3月31日)

認定特定非営利活動法人

みやぎ発達障害サポートネット

## I 年間の法人活動のまとめ

緊急事態宣言から始まったコロナ禍の状況は3年目となり、この間、福祉サービス提供に携わる多くの施設は、何かしらの影響を受けながらの運営を余儀なくされてきた。当法人でも、安心した利用につながる環境づくりに努めながら活動を進めてきた経緯がある。その結果、オンラインでの会議やセミナーから、参集型の開催が再開できるようになったこと、子ども支援事業における利用者数の増加となったことと、当たり前の日常を提供できたこの1年であった。

また、法人活動に当たっては、「法人のよさを生かした運営の充実」を第一の重点活動目標と掲げ、3年を経た。一人ひとりの発達の特性に応じた発達支援を大切にしていることが「サポートネットらしさ」であり、「サポートネットだからできること」を目指した確かな歩みが見られた1年でもあった。

ここに重点活動目標の3つの視点から検証する。

### 【子ども支援事業の安定的な運営を図る】

児童発達支援事業の利用登録者数47名は画期的な結果を物語っている。利用は1本の電話から始まり、来所見学となるが、そのほとんどが利用につながっている。初めてのところに我が子を委ねる要因はどこにあるのだろうか。保護者は、アットホームな雰囲気、保護者と一緒に考えてくれる、丁寧な説明で安心できるといった言葉と共に、子どもが通所日を楽しみにし、喜んで通っていることも話された。「虹っ子」のつよみともいえるこれらの関係性を大事にしてきたことが、安定的な運営につながったものと考ええる。

自主事業であるプリズムは、今年度の事業費割合(収入)が全体の25%を占め、開設以来の最高率となった。個別のニーズに柔軟に対応できる自主事業として存在感を増している。

### 【人材育成を図る】

子ども家庭庁の設立、文部科学省の調査では、学齢期における発達障害のある児童が8.8%という結果など、社会変化を感じ取りながら、かかわる子どもたちのよさを活かした支援は、日々の研鑽により培われるものと考ええる。宮城学院女子大学教授梅田真理氏を講師に迎えた年間6回の職員研修は、理論と実践を肌で感じ取れる醍醐味があり、まさに、何を大切にするのかを考えながらの研修であった。

さらに、次世代を担う人材育成は、法人のよさを生かしたゆるぎない運営の継承においても現在進行中である。

### 【計画的な資金確保と運用を図る】

法人全体の月毎収支(キャッシュフロー)の見える化に取り組んできた。理事会だけで

なく、責任者会議でも毎月報告し、現状把握と運用管理を共有してきたことは、資金の用途のみならず、法人全体の適切な運営を考えるきっかけにもなった。これまで介護報酬や利用料の請求事務担当者が作成してきたデータ（グラフ化）と併せて有効にはたらいたものとする。

## II 事業活動に関する事項

「法人のよさを生かした運営の充実」を第一の重点活動目標と掲げ、各事業の推進に努めた。

- I 法人のよさを生かした運営の充実
- ①子ども支援事業の安定的な運営を図る。
  - ②人材育成を図る。
  - ③計画的な資金確保と運用を図る。

### I 子ども支援事業

令和4年度の実績：月別利用人数（表1）

（人）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
プリズム	99	108	118	125	112	92	140	121	111	129	94	122	1371
児童発達支援	106	110	129	141	110	120	125	122	126	139	140	166	1534

#### (1) 発達支援事業プリズム（定款第5条（7）以外の定款第5条による）

- プリズムは10年目を迎え、利用者数69名、その内、新規の利用者数は19名だった。その多くは、児童発達支援からの利用が多いが、中には、保護者等支援事業のおしゃべりサロンや相談から利用につながっているケースもある。利用者は小学生64%、中学生23%、高校生13%となっている（図1）。支援形態は個別支援が36%、グループ支援が64%となっており、例年よりも個別支援のニーズが高かった（図2）。

プリズム利用者

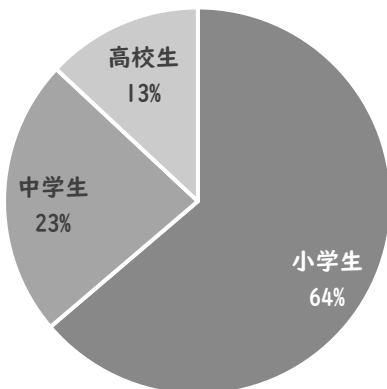


図1

利用形態

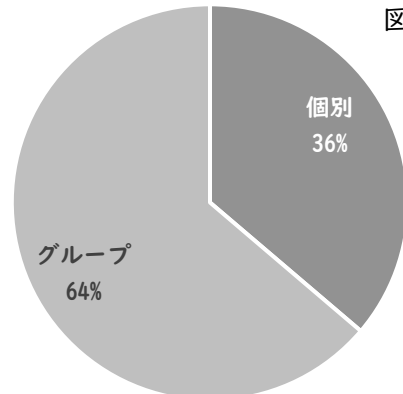


図2

個別支援が多い理由としては、年度途中で新規で利用を開始する場合、プリズムに慣れるまでの間を個別支援とし、次年度からグループを目指すケースや、放課後等デイサービスや通級指導教室でグループ活動をしているため、個に応じた支援を求めるといったケースが挙げられる。

- グループ支援は 12 グループで、3~5 名で編成されている。今年度から、より詳しいセッション内容を書いた「グループおたより」を発行することにした。保護者にとってはプログラムの詳細が分かり、職員もそれぞれのグループのねらいを共有することができるようになった。また、子どもの実態を考慮したグループを作ることで、子どもたちの会話が増え、友だちと話すことを楽しみに来所する様子も多く見られた。

主に中高生グループを対象に、グループ毎にアプローチを変えながら性に関する話を行ったところ、子どもたちから「スकेベなことを考えるのは異常なことではないと初めて知った」「学校では教えてくれないことだった」「もっとこういう話をしたい」という感想があった。保護者からも、性に関しては知らないことが多く、友だちと話をすることも少ないために、プリズムでもっと取り組んで欲しいという声上がり、概ね好評だった。

- プリズム勉強会では、「教えて加藤先生」（講師 加藤潔氏に質問をし、その場で答えていただく）を実施し、今年で 10 回目となった。また、初の試みとして、テーブルごとに設けられたテーマに沿って保護者同士が対話する「プリズムワールドカフェ」を開催した。自由に対話をしたことで、保護者同士で共感が生まれ、勉強会の新しい形を見出すことができた。
- 中高生、卒業生を対象にしたサークル活動（月 1 回実施）では、参加人数が増え、延べ 51 名と過去最多利用人数となった。中学生からは「同じくらいの年の子と遊ぶのが楽しい」という意見があり、プリズムの活動よりも自由度が高いところにも魅かれていたようだ。主な活動内容はカラオケ、ゲームだが、「コロナが落ち着いたら、またみんなでご飯を食べに行きたい」という声が上がっている。
- 1 回毎に予約をして利用するプリズムポーションは、年間の総利用数が 30 回だった。利用目的としては「障害の告知をしてほしい」「月 1 回程度の利用がいい」「たまに先生に話を聞いてもらいたい」が挙げられた。「放課後等デイサービスを利用している自分は障害者なのか」と疑問を持っていた子に告知をしたところ、「僕、ADHD は悪いことだと思っていた。なんだ。そういうことなのか」と安心した表情を見せ、自分の長所に立ち返りながら、特性理解を深める様子が見られた。

また、いつもはグループ支援を利用している子も、特性について個別に相談したいというケースや、学校で嫌なことがあったので、緊急に相談をしたいというケースでポーションを活用していた。このような場合、特性があることを前提に行動を振り返ったり、解決策を考えたりすることができていることから、プリズムに通う意義を本人たちが理解していることが伺えた。

- 会報誌すぽっとで「プリズム 10 周年特集」を掲載し、その中で卒業生にアンケートを実施したところ、18 歳から 24 歳までの 23 名より返答があった。これまでを振り返

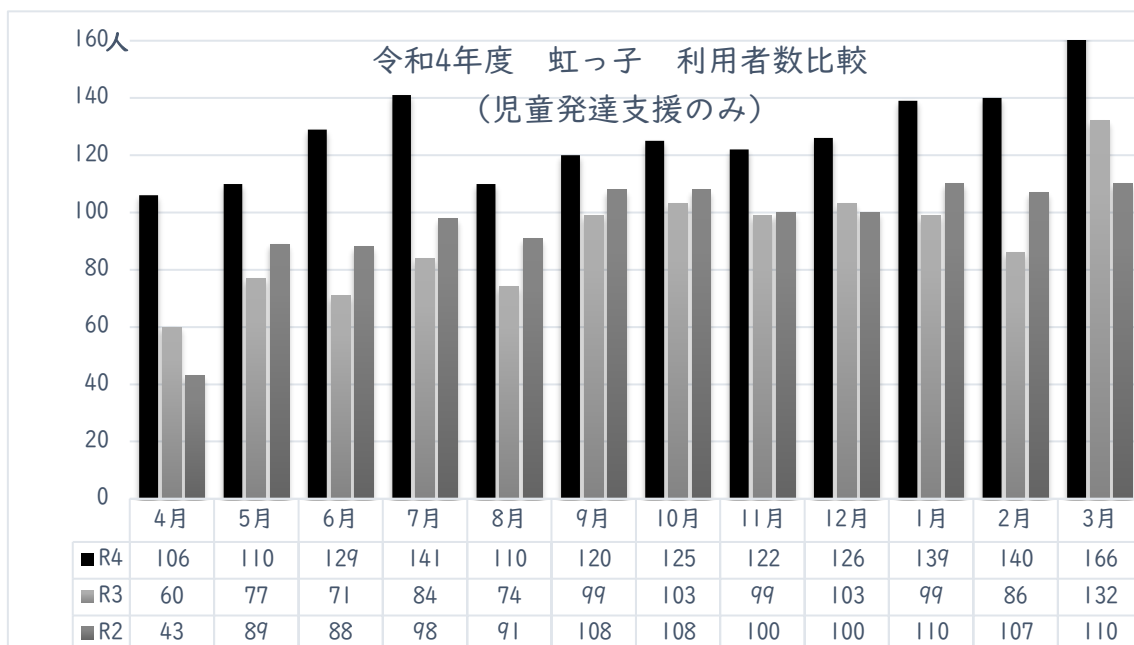
ってどうかという設問では、小学生時代「イイ感じ」「まあまあ」と答えた割合が 54% に比べて、中学時代 56%、高校時代 66%、現在 85%と、次第に過ぎやすくなっていることが見えた。また、現在がんばっていること、卒業後に嬉しかったこと、人に言いたくなるようなことにもとても前向きなコメントが寄せられ、それぞれの道で自分らしく歩んでいる様子を伺うことができた。

## (2) ぬくもりすべいす虹っ子 (定款第 5 条 (7) による)

### 1) 児童発達支援事業

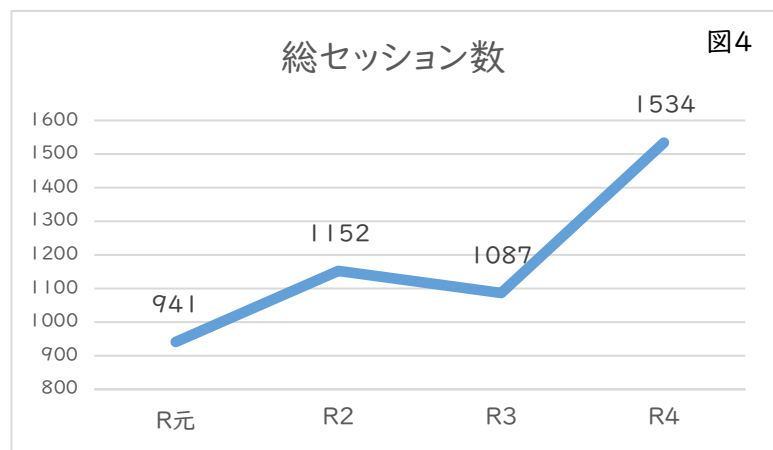
令和 4 年度 虹っ子 利用者数

図 3



- 放課後等デイサービス事業を廃止し、児童発達支援のみの運営になって 2 年目は、大きな成果を残すことができた。まず、登録者人数は目標の 45 名を超え、47 名まで増やすことができた。4 月に 30 名でスタートし、上半期で 10 名増となり、初めて上半期だけで 40 名を超えた。下半期は 7 名増で、最多登録者数更新となった。

次に、年間の総セッション数は、1534 セッションとなり、令和 2 年度に記録した 1152 セッションから



大幅な更新となった。さらに、報酬額についても、多機能型（児童発達支援と放課後等デイサービス）運営時の最高記録を更新することができた。新型コロナウイルス感染症による影響を受けつつも、安定的に運営を続けることができたことは大きな自信となった。

その一方で、利用者増がもたらす現場への影響もあらわれてきた。今までより多い人数を、限られた時間と限られた空間で実施することは、活動の場所や音の問題が生じることにつながった。新年度は、開始時間をずらす、部屋を再構造化するなどして、子どもたちがより快適に、かつ、力を発揮できるように工夫をしていきたいと考える。

児童発達支援事業では、他に次のような成果が得られた。

① 新規利用者の獲得について

令和3年度と同様に、年間を通して問い合わせや施設の見学・体験が多くあった。数多くの事業所の中から虹っ子を選択した保護者に対し、丁寧に話を伺い、子どもに必要な支援をともに考え、形にするまでの過程を大切にしてきた結果、利用につながった割合は80%に上がった。

② 個別のセッションにおいて

「個に応じた支援」を職員一人ひとりが意識し、子どもたちの発達段階や興味・関心に合わせてセッションを組み立ててきた。年度の後半になるにつれ、職員のスキルアップも相まって、子どもと職員だけでなく、保護者と職員の信頼関係にも深まりが見られた。保護者向けに実施した事業所評価（アンケート）の「支援に満足しているか」という問いで、回答者全員に「はい」という回答をいただいたことが、その証であると感じている。

③ 小集団活動の実施に伴う子どもや保護者の変化

令和4年度は水・土曜日に、3グループの小集団活動を実施した。この春、小学校に入学し、特別支援学級に入級した4人のメンバーがいたグループでは、職員が想定していた以上の成長が見られた。それは、幼稚園や保育園では集団行動が難しい子どもたちでも、環境を整え、課題の内容や提示の仕方を工夫することで、グループの一員として、意欲的に楽しみながら活動をすることができたことである。さらに、このことを保護者と共有できたことで、保護者が子どものつよみを知り、就学への不安を少しでも取り除くことにつながったと考える。

④ 保護者向けのイベント開催から

(表2)

開催月	イベント名	参加人数
5月	就学準備の会	11名
7～10月	ペアレントプログラム(全6回)	6名
10月	先輩ママに話を聞く会～特別支援学級編～	4名
1月	ミニ講座「就学に向けての心構え」	9名

保護者支援を「欠かせないもの」として捉えていることから、これまで個別に保護者の話を丁寧に聞くということに注力してきた。しかし、支援者と保護者のつながりだけでは補えない、保護者同士の横のつながりを生み出していくために、今年を上記のイ

イベントを開催した。どの会も充実したものとなり、参加者の反応もとてもよかった。その後、保護者同士の交流も増えたように感じる。

新年度もニーズを伺いながら、保護者同士が出会い、つながる場を提供するためのイベントを開催していきたい。

## 2 保護者等支援事業（定款第5条（7）以外の定款第5条による）

保護者等支援事業の参加人数（表3）

（人）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
相談支援	10	19	13	9	10	16	8	9	14	8	11	9	136
問合せ	0	7	3	3	2	6	1	2	3	2	4	2	35
学び合い				52				47					111
ふわり	4	3	4	4		5	6	2	3	3	5	4	43
ラルクママ	7	7	6	2	0	4	4	5	3	6	6	3	53
サロン合計	11	10	10	6	0	9	10	7	6	9	11	7	96

・学び合い全2回開催

・ふわり8月は休み

### （1）相談事業

- 相談件数の総数は、令和3年度の116件に比べ、令和4年度は136件と約2割の増加だった。令和4年度も新規の相談が多く寄せられたが、その傾向として、サポートネットを利用者から紹介されて相談に来るケースが多かった。その後、相談者が会員になる、またはプリズムの利用開始に至ることが多く、さらに、継続の相談申し込みが多いということが特徴的な一年だった。

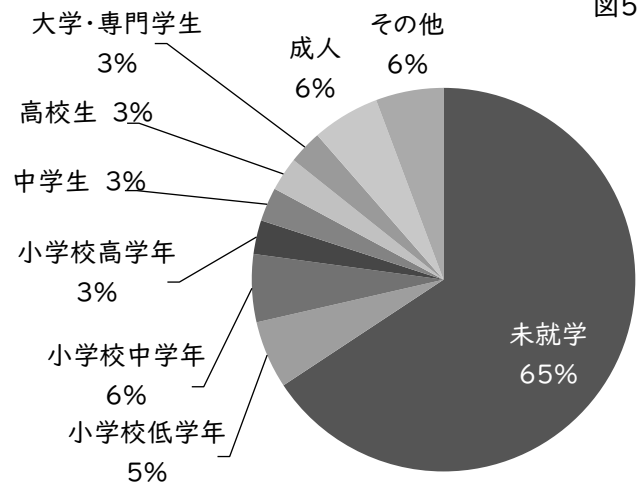
また、問い合わせの総数は40件で、前年度の51件に比べると減少している。

問い合わせの対象者の内訳は、未就学児が過半数で前年度と変わらず、他機関からの紹介によるものが多かった。これは、児童発達支援事業「虹っ子」を見学したい、利用したいという内容が主であり、そのほとんどが利用につながっている。（図5）

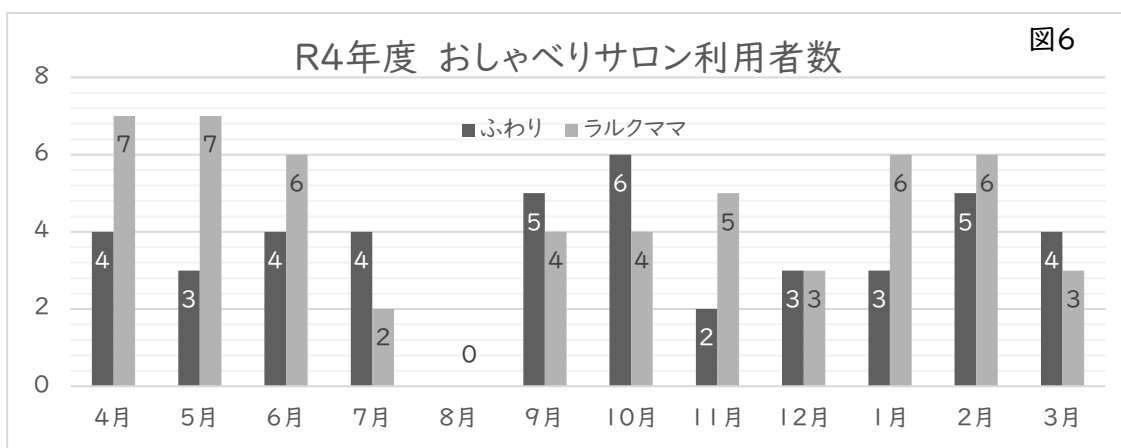
子どもたちへ直接支援をするための第1歩が、保護者からの問い合わせとなるので、今後も丁寧に対応することで、安心感を持って事業所を訪れてもらえるように努めたい。

R4年度 問合せ対象者の年齢

図5



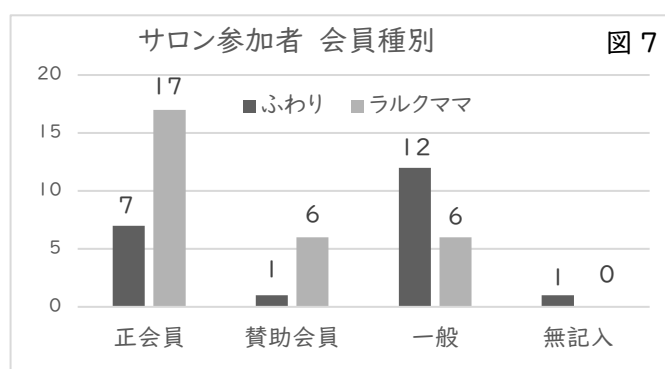
## (2) おしゃべりサロン事業



令和4年度のおしゃべりサロンの年間利用者数は96名で、未就学から学齢期の保護者が参加する「ふわり」が43名、高校生から成人期の保護者が参加する「ラルクママ」が53名だった。8月のラルクママは参加者がいなかったものの（8月のふわりは休み）、少人数ではあるが毎月参加者がいるのがわかる。（図6）

ここ数年、参加人数は減少傾向にあるが、対面でおしゃべりする機会や保護者が集まる機会の大切さを実感している。理由として、特に発達障害の子どもの子育ては孤独を感じやすいことが考えられる。子どもが集団での活動に困難を抱える場合が多く、園や学校、子供会や習い事など地域の中では、発達障害のある子どもの子育ての悩みを相談する機会が少ないため、同じような悩みを抱えている保護者が出会うことは難しい。そこで、出会いの場としておしゃべりサロンが持つ役割が期待されてくる。対面で保護者が集まり、我が子のことを話し、聞き合うことで保護者の孤独感を軽減する一助となると考える。

参加者の会員種別を見ると、「ふわり」は一般の参加が多く、「ラルクママ」は正会員の参加が多い（図7）。毎回、行っているアンケートには「2年振りの参加でしたが、いろいろな方の話が聞けて楽しい時間でした。次回も参加したいと思います。」という感想があり、



、たとえ参加者が少数でも、おしゃべりサロンを続けていくことが大切だと感じた。

今年度も「ふわり」のテーマを工夫して設定し、2つのイベントを開催することができた。10月のイベントでは、「きょうだいの思い～親御さんに知ってほしいこと～」と題し、きょうだいの当事者である高橋壮氏をお迎えした。ご自身の体験をもとにきょうだいの気持ちを率直に話され、参加者からは、「きょうだい支援が必要なことは知っており、きょうだいに対して何かしなければと思いつつもどうしてよいのか分からなかったが、今回きょうだい側の思いや願いを知ることができて良かったで

す。」という言葉が寄せられた。

(表 4)

発達障害のある本人だけでなく、きょうだい支援について考えるきっかけとなり、今後もきょうだい支援、家族支援をテーマにしたイベントを企画していきたい。

2月には、祝日にサタデーふわりを開催した。大雪の中、平日開催のおしゃべりサロンに参加できない方や父の参加もあり、仕事をしている保護者向けに一定のニーズがあることが分かった。働く親にとっては子育ての悩みを共感できる人に出会う機会が少ないという現状があり、保護者の出会いの場として、悩みを共感できる場として、おしゃべりサロン事業の継続性が求められていると考える。

	令和4年度 ふわり テーマ
4月	先生にどうやって伝えていきますか？ ～我が子の特性の伝え方～
5月	フリートーク
6月	家族・きょうだいについて
7月	フリートーク
8月	(休み)
9月	たまったストレスをどうしていますか？ ～親のストレス解消法～
10月	きょうだいの思い ～親御さんに知ってほしいこと～ ゲスト：相談支援専門員 高橋壮氏
11月	フリートーク
12月	みんなどうしてる？～診断のあれこれ～
1月	フリートーク
2月	サタデーふわり
3月	フリートーク

### (3) 学び合い事業

当法人の学び合い事業には、次の3点のねらいがある。

- ①保護者、会員の発達障害に関する理解を深め、協働療育を進める。
- ②一般市民に発達障害の理解を深める。
- ③支援者（職員を含む）の専門性を高める。

#### 1) セミナー等の開催

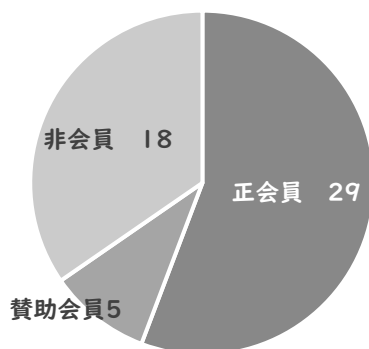
2022年度 自閉症・発達障害児者支援セミナーを2回開催した。

第1回 7月3日 「ライフステージの対応と支援」 講師：加藤潔氏（オンライン開催）

第2回 11月3日 「思春期のこころとからだをひもとく」 講師：大塚達以氏

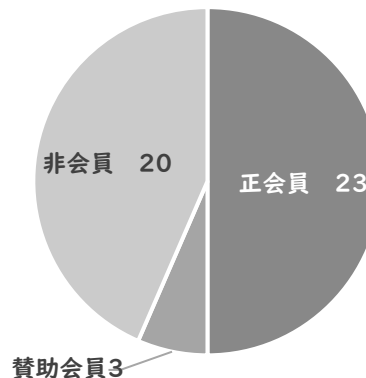
加藤潔氏セミナー参加会員種別

図 8



大塚達以氏セミナー参加会員種別

図 9



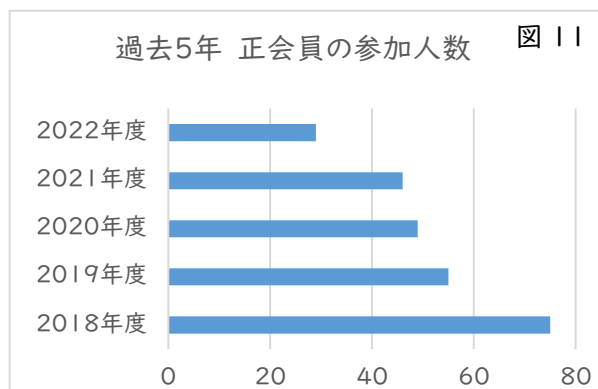
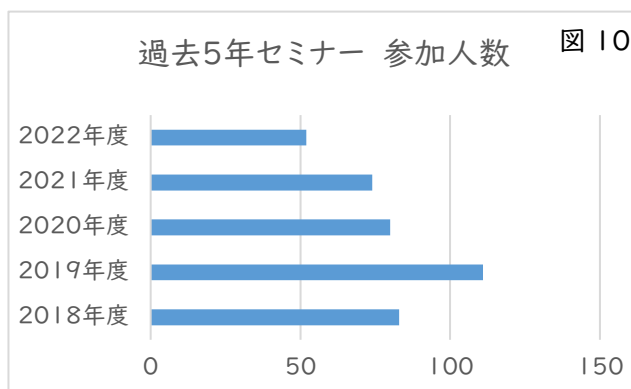


- コロナ禍の中、年2回のセミナーをオンラインだけではなく、対面での実施を再開することができ、講師の表情や会場の参加者の真剣な眼差しから、改めて対面で話を聞くことの良さを実感できた。
- 過去2年間のセミナーと比較しても非会員の参加が増えてきている（図8,図9）。第2回は、まだオンライン開催のセミナーが多い中、久々の対面セミナーだったことや一般の方にとって「聞いてみたい」「参加したい」と思えるような参加意欲につながるテーマ設定だったと推測する。
- グーグルフォームにてアンケートを実施したことにより、感想を詳しく記入する参加者が多く、セミナーに対する思いを知ることができた。

「支援で必要なことをいくつもの年代で見ることが出来たのが、とても勉強になりました。普段、働いていると、支援対象の年齢についてしか、なかなか目が向けられませんが、様々な年代を通して学ぶことで、自分が行う支援が少しずついい方向に変わっていくのかもしれないと、希望をもつことが出来ました。」

「思春期にどう向き合うか、ヒントをいただきました。体の変化は何となく意識していたのですが、心の悩みの向き合い方、悩みを共有できる仲間の必要性を改めて感じました。同世代の友達と関われるように今まで以上にサポートしていきたいです。また、悩みを説明できる話し方も学んでいきたいです。」

この2つの感想を例に見ても、具体的に書かれていることが分かる。その場で書くよりも自分の好きな時間に入力でき、時間が限られていないことも要因と考えられる。これからもセミナーのアンケートは、グーグルフォームを活用していきたい。



- 図10, 図11 から分かるように参加人数は年々減少傾向にある。その背景には、コロナ禍における状況の変化があり、オンラインセミナーの増加、無料視聴での動画が増えてきていることが挙げられるだろう。さらに、アーカイブでいつでも自分の好きな時間に視聴できることも減ってきている要因の一つと考える。
- 非会員の参加が増えてきた一方で、正会員の参加が減ってきている。長年、セミナーに参加している正会員にとっては、講師の選択や講演内容などがマンネリ化してきた可能性がある。今一度、会員をはじめ、広く市民にとって「聞いてみたい」と思ってもらえるようなテーマ設定を考えていく必要がある。

## 2) 職員研修

当法人の活動目的や活動内容を鑑み、職員研修は研鑽を積む場の一つとして位置づけ、次のような視点から実施している。

○職員研修の学びから専門性の高い人材育成を図る。

○法人組織を考えた視点を持ち、地域社会に向けてのアドボカシーできる人材育成を図る。

令和4年度 職員研修一覧（表5）

<p>専門研修</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 7/3, 11/3 学び合い事業のセミナー（2回）を受講</li> <li>・ 7/3, 9/4 プリズム勉強会（2回）を受講</li> <li>① 6/30 「事例検討会①」</li> <li>② 8/4 「学習障害のある子どもの理解と支援」</li> <li>③ 9/1 「事例検討会②」</li> <li>④ 10/6 「子どもの発達と個に応じた支援」</li> <li>⑤ 12/1 「教えて真理先生」</li> <li>⑥ 2/2 「事例検討」</li> <li>①～⑥ 講師：梅田真理氏〔宮城学院女子大学 教育学部教授〕</li> <li>・ 10/28 令和4年度発達障害基礎講座 「アーチルの役割と本人が地域でくらすための連携・協働した支援について」 講師：大石葉子氏〔南部発達相談支援センター〕</li> <li>・ 11/29 アーチル 20周年記念研修会 「発達障害児者のこれからを考える」</li> <li>・ 3/2 「NPOで活動する意義」 講師：大久保朝江氏〔認定NPO法人杜の伝言板ゆるる 顧問〕</li> </ul>
<p>職員研修</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 10/28, 3/30 虐待防止・身体拘束適正化研修</li> <li>・ 1/5 WISC-IV 知能検査について</li> <li>・ 3/16 防犯講習会</li> </ul>

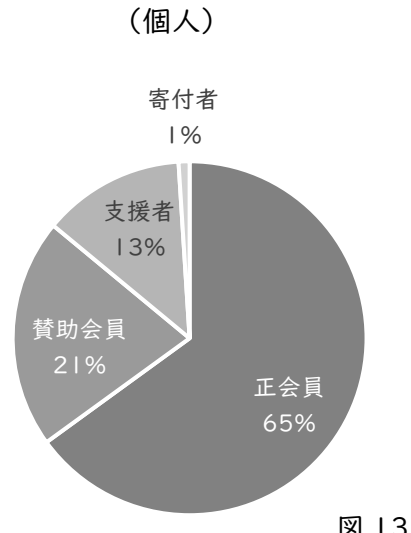
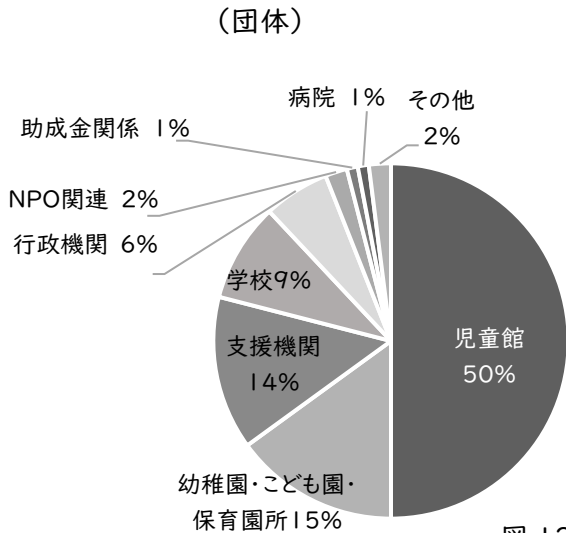
## （4）情報発信事業

### 1) 会報誌「すぽっと」について

会報誌は活動の様子、事業についての記事やセミナー・勉強会についてなど様々な内容を記事にし、隔月に発行することができた。9月には、職員全体で「NPO法人として、すぽっとを通して伝えたいことは何か」というワークショップを行った。職員一人ひとりが、改めて会報誌の在り方や社会に発信していくことについて考えるきっかけとなり、今後の取り組みとして30以上の案が集まった。情報発信事業以外の職員に意見を聞くことで、記事の幅を広げることにつながった。

さらに、送付先の見直しを行い、現在、約 240 か所に 370 通を送付している。新たに、サポートネット利用者に関わりのある相談支援事業所や病院に送付を開始したほか、発達障害への理解やサポートネットの活動内容を広く知ってもらうため、虹っ子を利用する保護者への配布も行ってきた。(図 12, 図 13)

令和 4 年度 すぽっと送付先



## 2) IT (ホームページ・ブログ・Facebook)

令和 4 年度 掲載記事数 (表 6)

(件)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
ブログ	14	17	17	16	17	13	17	14	13	13	9	14	174
Facebook	14	17	17	16	17	13	17	14	13	13	9	14	174

- 目標としている毎月 12 記事の投稿をおおむね達成した。情報発信事業以外の職員にもブログ執筆を依頼することで、全職員が情報発信を行うことができた。
- ホームページの掲載内容は、職員の有資格者数を掲載するなど、現状に合わせて内容を更新した。
- サポートネットの活動や思いをより効果的に発信するため、SNS の使用や内容について担当職員で議論を重ねている最中である。令和 5 年度中に議論を形にし、さらなる情報発信の充実を図っていきたい。

### Ⅲ 組織運営に関する事項

#### Ⅰ 総会の開催（表 7）

開催日	種類	審議内容	審議結果
令和 4 年 5 月 2 2 日	通常総会	第 1 号議案 令和 3 年度事業報告並びに活動決算報告について	承認
		第 2 号議案 令和 4 年度事業計画並びに活動予算について	承認
		第 3 号議案 役員（理事・監事）の選任について	承認

○ 新型コロナウイルス感染症拡大防止により、Zoom 利用オンラインによる開催とする。

#### 2 理事会の開催（表 8）

開催日	回	審議内容	審議結果
令和 4 年 4 月 2 8 日	第 7 9 回	第 1 号議案 令和 3 年度事業報告並びに活動決算報告について 第 2 号議案 令和 4 年度事業計画並びに活動予算（案）について 第 3 号議案 役員の選任について その他報告事	承認
令和 4 年 5 月 3 1 日	第 8 0 回	報 告 通常総会の結果について 第 1 号議案 代表理事の互選について 第 2 号議案 法人運営について その他報告事	承認
令和 4 年 9 月 6 日	第 8 1 回	第 1 号議案 各事業に関する現状と今後について その他報告事	承認
令和 4 年 1 0 月 2 5 日	第 8 2 回	第 1 号議案 令和 4 年度各事業の運営（上半期の振返り）について 第 2 号議案 法人運営について その他報告事	承認
令和 5 年 3 月 2 5 日	第 8 3 回	第 1 号議案 令和 5 年度事業計画案 について 第 2 号議案 令和 5 年度活動予算案について 第 3 号議案 法人運営に関することについて その他報告事	承認

### 3 会議の開催

(1) 全体ミーティング

3回/年開催

(2) 責任者会議

毎週水曜日 各事業の実施状況や今後の運営について、各事業責任者によって開催

(3) 支援スタッフ会議

スタッフミーティング 毎日開催

プリズムミーティング 月2回開催

児童発達支援職員会議 月1回開催

(4) 事務局スタッフ会議

スタッフミーティング 毎週火曜日開催

### 4 会員（構成）（表9）

（人）

会員種類	令和 2.4.1 現在	令和 3.4.1 現在	令和 4.4.1 現在	令和 5.4.1 現在
正会員	126	116	115	116
賛助会員	29	30	33	32

### 5 事業の実施体制

(1) 理事会 定数 理事5名以上 監事1名以上

現在数 理事7名 監事2名

(2) 職員 常勤……6名 非常勤……6名

### 6 ボランティア

新型コロナウイルス感染症拡大防止策の一環として、積極的な受け入れ体制は取らないでいたが、年度の後半に子ども支援事業において、一般の方1名と大学生1名のボランティア活動の申し出があるなど、全体で129時間の協力を得ることができた。

また、会報誌すぽっとの発送作業日には、これまで継続したボランティア協力を得てきたが、今年度はプリズムを利用している高校生からも作業の協力を得た。

さらに、3月からはプリズム卒業生がボランティア活動に加わっている。

ボランティアは限られた時間の中ではあるが、思いを共有し、ともに活動するために、法人にとっては欠かせないリソースと捉えている。

### 7 助成金による事業

一般公募された助成事業への応募はないが、次の補助金を申請し、それぞれ交付された。2の事業については、「職場の業務改善のための個別事業所支援」とタイアップし、全職員で業務改善を目指して取り組んだ。

1 宮城県福祉・介護職員処遇改善臨時特例交付金に申請し、宮城県福祉・介護職員処遇改善支援事業補助金として交付される。

2 令和4年度障害福祉施設の原油価格・物価高騰等緊急対策投資促進事業補助金（ICT

設備等導入支援事業)に申請し、交付される。

3 仙台市福祉施設等電気・ガス等価格高騰対策事業補助金に申請し、交付される。

## 8 他団体との連携・ネットワーク会議等

今年度は下記の他団体と連携を図りながら、アドボカシーできるNPOとして活動をすすめた。

① JDDNET (日本発達障害ネットワーク) / エリア会員登録

年間を通して情報受信、アンケート提出

② アスペ・エルデの会 / 研究協力団体登録

年間を通して情報受信、研究協力

③ 発達支援ひろがりネット

総会、運営委員会

宮城県障害者施策推進協議会委員として参加

④ 公立学校等との連携

連携会議参加

⑤ その他

○ アーチル及び相談支援事業所主催の担当者会議等 支援担当者として参加

○ 認定NPO法人 グループゆう 評議員として参加

○ 東四郎丸児童館応援隊 隊員として参加

○ 家庭裁判所委員会 委員として参加

○ 青葉区公立保育所所長会研修で8名来所 講師として参加

○ 学びのまち仙台市民カレッジ 四民プロデュース講座

「子どものこころのアレやコレ」に講師として参加